

## 第一部 質疑応答

**発言者1** 大変興味深いお話をありがとうございました。服部先生のお話で、主に知的障がいの方のお話をされたと思います。三月にされたという精神障がいとの関連の勉強会に私は来ていないものですから、少し教えていただけたらと思います。

**服部** 三月は、式場隆三郎とか野村章恒がその当時に発表した患者の作品についての評価を取り上げて、その中には、診断のよなもの、例えばこの絵には統合失調症のどういう特徴がどういふところに現れているとか、こういう絵を描くのは躁鬱の傾向のある人だ、というような病跡学的なものがあつたり、あるいはこのような大胆な色彩は素晴らしいという美術批評的な表現が出てきたり、本人はこういう創作を繰り返していくうちにだんだん様子が変わって、というようなセラ皮的な、観察的なものがあつたり、あるいは、制作を続けさせたり、作品が世に出ることによって精神障がいがある人に対する社会の見方が変わるといふような、社会福祉的な目線が文章の中に現れているとか、そのようなことを分析的に見ていきました。

今回については、山下清について似たような手法でやっていますが、昭和一〇年代までの精神科医・野村、式場のほうはや猟奇的などうか、ちょっと趣味本位のところがあります。それが昭和一〇年代の半ば以降になってきて、山下清の問題の場合はより広く社会的な影響やインパクトがありました。その辺の違いがあるのではないかと思います。

**発言者2** 甲南大学文学部人間科学科の学生です。服部先生に質問です。山下が教えられて貼り絵を作っていたとありましたが、山下は果たして何も考えずに受け入れていたのでしょうか。私は狂人という言葉を使うならば、狂人にも心があると思います。先生は、鳥の羽の話で笑いを誘いましたが、先生の距離と患者の距離はすごくあると思うんです。その距離の中で山下の心というものを本当に考えられるのでしょうか。うまくまとめられませんが。

**服部** 山下自身は、手記にもあるように、貼絵の作業はかなり喜んでやっています。というのが、四冊本の放浪記を読んでいてもわかるんですけども、山下自身は基本的に何もしたくない人のようなんです。できるだけ何もせずにのんびりとしていたいというスタンスで、戦後の放浪時代も含めて日々の生活を送っています。

ところが、学園の中ではいろいろなことがあります。作文を書かされたり、掃除をさせられたり、園芸作業があったり。その中で貼絵は本人にとって比較的単純な作業だったようです。いったん貼り始めてしまうと、もう何も考えずに、忘我というか、没頭することで社会的なつながりも断てるし、集中してできることで、比較的喜んでやっていたのではないかと思います。

**発言者2** たくさんある作業療法の中で貼絵を選んだということですね。ということは、選んだところに心があったのではないのでしょうか。私も実は作業療法をたくさんしたことがあります。山下があれだけの作品を作ったならば、したいという心があったのだと解釈できますし、そうしたらそこに心があったとは思われないうです。

**服部** もちろんあったと思いますよ。もちろん山下清は喜んでやっていたというか、興味を持ってやっていたことには全く否定はしません。ただ、ここで問題にしたいのは山下の周辺にいた人のことです。どのように貼るかについては、今回の資料の中にもありますように、山下清は誰にも教えられずに自発的に雲の出し方や影の出し方とか、こよりの作り方とか、中間色を出すために色紙の裏側を使ったとか、いろいろなことをやった

というように神話化されています。ところが、その多くのことが実は八幡学園の中で、「こうやってみたらどうだい」という描き方の指導があり、山下がそれを受け入れてやっているという部分がかなりある。その意味ではセラピー的なものでもある。そういうことを今回は指摘したかったのです。

**森** 甲南大学の森茂起です。のちの議論になるかどうかかわからないですけども、今までのところで出てきていない話題として、高村智恵子を考える場合に高村光太郎との関係というのはやはり重要だと思っわけです。作品にしろ、その元になっている機織りにしろ。彼女はこういう関係の中でそれを作っていたかということが重要になっていきますけれども、それは今日の心理療法を考える場合でも、作品そのものを考える視点と家族関係の中でそれがどういう意味を持つかということも関係してくるので、のちの議論にあってくれたらいいかなとちょっと思いました。

**川田** その点は、今日は時間を限ってしまったのでお話をうかがえなかったのですが、実は木股先生が研究会のときにお話しくださったことですので、木股先生、お願いします。

**木股** 大変不思議に思えるのは、光太郎は自分が原因の一つだ

と考えていないことです。例えば、智恵子が行き詰まっていたら、それを突破するために油絵の専門家に教えを請うことを仲介するとか、そういうことをやるべきではなかったかなと思っ  
ています。

ただ、今度一番思ったことは、光太郎の考え方は内面至上主義で、多くの若い芸術家たちをリードする一つの思想としても機能して行くのですが、それが結果的にはシステムそのものの存立を補強するというパラドックスにつながっている面もあるのです。例えば個々のつながりを切断してしまうということは今でも大きな問題じゃないかと思っただけです。

森先生の質問からはずれるかもしれないのですが、光太郎自身は内面の体験を蓄積していくというところで文章も書いていきます。自身はものすごく深めていくわけですが、でも、伴走者としての智恵子はそれと同じようにはいかない。同じようにいかないことがすごくコンプレックスになり、内攻していく。そこを解除する方向をなぜ打ち出せないのか。そういう発想がどうして湧いてこないのか。光太郎は、芸術は個人の責任でやっていくしかないんだという考え方なのか。その辺が大変引っ掛かったところですよ。

ですから、夫婦にしても、恋人にしても、同志にしても、友人にしても、システムの中で相互に束縛し合わないような関係性はどのようにしたら可能なのかというのは、一九一〇年代で

も現在でも、同じような重要性を持つ問いかけではないかと、二人の関係を調べて思った次第です。

川田 もう少し私からも補足させていただきますと、智恵子と光太郎の関係は、今日のご講演の中にも出てきましたように、光太郎自身が智恵子のことをまるで女神のように、あるいは何か超越的な存在であるかのように理想化して語り続けるというものでした。智恵子は、そのような理想化された女神としての女性を光太郎の前では演じなければならぬ。と同時に、家庭生活に入っているわけですから、光太郎が芸術家としてその道を精進しようとするれば、どうしても智恵子が家の中の仕事を全部引き受けて、妻としての役割も果たさなければいけない。

そうする中で、しかし自分自身もまた世間から注目された新進気鋭の女流画家として、何か作品を作っていきたい。けれど、その状況では、なかなか作品を作ることができない。非常につらいですね。どのシステムに自分が属しているのか。つまり、その当時の家族制度、妻の役割というシステムに属しているのか、それとも新しい女、世間が求めるような前衛女流画家としての役割を果たしていくべきなのか。その葛藤の中で生きていたのではないかと私などは思います。こうしたことは研究会の中で木股先生がいろいろと教えてくださった内容です。

それでは、そろそろ時間になってまいりましたので、ここで

休憩に入らせていただきたいと思えます。休憩に入ります前にも少しお願いがございますので、お聞きいただけますでしょうか。前のスクリーンに映しておりますのは、ついこの間、智恵子のふるさとである福島県二本松市に行きまして、私が小さなカメラで撮ってきた安達太良山の風景です。実はギャラリーに展示中の智恵子の紙絵は、この智恵子のふるさと、二本松市からお借りしてまいりました。

福島県といいますと、東日本大震災で大変な被害を被ったところですが、二本松市はかなり内陸部にありますので、津波からは免れました。福島というと放射能汚染が大変な問題になりましたが、風向きとの関係でしょうか、智恵子の愛した山々のおかげなのでしょう、二本松市は危険区域としての指定からは免れたそうです。しかし、地震に関しましては、智恵子の生家、智恵子記念館なども大変な被害を被りました。市役所の方からいただいた被害状況の写真をご覧ください。二本松市歴史資料館からも智恵子の作品をお借りしてきたのですが、そこにたくさん収蔵・展示されていた土器などもほとんど全部が破損してしまうという大変な被害だったそうです。

こうした被害がありますが、近隣では二本松市だけが避難先になったものですか、ほかの地域から多くの人が二本松に避難して来られ、二本松の方々は救助活動に懸命に当たっていらっしゃると思います。お金も人手も、当然ながらそちらに優先的

に使うことになりそうですので、ご覧のような文化施設へは、お金も人手もなかなか回らないような状況が続いているとお聞きしました。

そこで、会場にもこれらの写真を掲示させていただき、二本松市の文化施設、そして文化財を復旧するために使っていたかどうかということでも募金箱を置かせていただいております。どうかぜひともご協力をいただけますようお願いいたします。

それから震災がらみで言いますと、本シンポジウム後半にも話題になりうる気がかりなことがありました。六月九日のことですが、心のケアのために被災地の子どもに絵を描かせる「アートセラピー」について、日本心理臨床学会が注意を呼びかける指針を発表しましたね。心の不安を絵で表現することは、必ずしもPTSDの予防にはならず、かえって傷を深くする場合もある、と。

こうしたことも併せまして、アートセラピーについて、あるいは芸術と医療について、後半で議論を展開していただきたいと思えます。